

佐藤次男論文翻刻にあたって

解説

吉村武彦

古代史の史料は、数が少なく限られている。そのなかでは、正倉院文書が一大史料群として異彩を放っている。ところが、一九六一年に平城宮跡から木簡が出土して以来、木簡の数は今日では二十万点を越えるといわれる。こうした史料群に対して、つとに木簡学会が組織され、また正倉院文書研究会も毎年盛会に開かれており、研究はますます精緻をきわめている。このように研究対象となる素材に対し、悉皆調査がほどこされ、学問の王道を歩むような研究が進行している。

ところで、木簡以外にも出土文字史料がある。大量に存在する史料が、墨書土器（刻書土器を含む）と文字瓦とである。これらについては、発掘担当者や地域の研究者によって地道な研究が続けられてきたが、なぜか全国的なデータベースの作成は行なわれてこなかった。

さて、墨書土器研究の到達点といえば、二〇〇〇年に刊行された高島英之『古代出土文字資料の研究』（東京堂出版）と、平川南『墨書土器の研究』（吉川弘文館）とであろう。墨書土器の研究に際しては、両書をひもとくことになる。二人の研究姿勢は、墨書土器自体の研究と地域との関連研究とであり、研究は堅実な手法で行なわれている。

ところが、不思議なことに両書とも、これまでの研究史の記述が十分ではない。執筆に際し、すでに多くの出土文字史料があり、直接、墨書土器を利用して研究が行なわれたからであろう。しかし、学問の手続きとしては、学史となる研究が必要であることはいうまでもない。

全国的な墨書土器データベースと研究史がない状況で、私たちは一念発起して、データベースの構築に取り組むことにした。平成一一（一九九九）年度～平成二三年度科学研究費補助金を得て、研究を開始した。そのささやかな成果の一部が『古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究』（明治大学、二〇〇二年）であり、文献目録は報告書、データベースはCDとホームページのかたちで公開した。墨書土器のデータベースについては、学界から好意的な評価を得て、実際に使われている。

こうした墨書土器の研究を進めるなかで気づいたのが、先学の二人の研究であった。佐藤次男と大川清である。資料の集成は主に大川の手によっていたが、研究分析の面では佐藤によって興味深い研究が行なわれていた。この佐藤の研究は、現在からみても重要な論点を含むものであり、研究史として軽視できないと考えた。そ

ここで、ご遺族の了承を得て、主要な論考を翻刻することにした。元の論文は謄写版でなかなか読みづらいものであったので、復刻ではなく翻刻の途を選ぶことにした。翻刻にあたっては、第一次翻刻作業は志村佳名子があたり、その翻刻原稿を黒済

玉恵が監修・補訂したうえで、必要な補注をつけた。

なお、残念なことに佐藤次男さんは本年二月二〇日に鬼籍に入った。享年七五歳である。